

---

# HEAVENの小話

coconeko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

HEAVENの小説

### 【著者名】

coconeko

### 【あらすじ】

持ち前小説「HEAVEN! ベン! HEAVEN!」シリーズの小説です。キアルが夜目を覚ますと、セインはまだ起きていて…。ほのぼのしつります。まさに小説。

(前書き)

次回作の構想は出来ているのですが、手がつけられず。浮かんだ小話だけでもと思いしPです。すみません。

さわり、と、風が揺れる。ひやりとした、心地よい冷たさが頬を撫でた。

目の前には、動物避けの焚き火。

「何してんの？」

ちょっととした森の中で、砂地が開けた場所に、今夜は寝泊りをしようと決めたのが、一時間ほど前。

軽く食事を済ませて、床を作り、キャラルが目を瞑ったのは、三十分くらい前だつた気がする。

「眠れない？」

眼を瞬かせ、こちらを見上げる小さな少女を、長身の青年が、少し離れた場所に腰を下ろしたまま見下ろした。

「あたしが質問しているのだけど？」

「そうだった。『ごめん』

素直に謝る青年に、キャラルは一つ溜息をつき、彼が掛けてくれたであろうブランケットの下から体を起こす。

「もうすっかり、星の季節になつたなあつて、思つて」

「セインはそういうの、好きなの？」

「好きっていうか、人並みには綺麗だなあつて、思うよ？」

そう言つた青年が、ほら、と、天空を指差した。

「・・・・・・」

一瞬、言葉を失うほど。

「綺麗でしょ？」

「・・・す、す、い、」

満点の星たちはキラキラと、まるで降り注いで来るよつて、数え切れない小さな輝きを放つ。

「ここまで沢山見えるのは珍しいよね。昨日まで降っていた雨のおかげかな」

雨が降ると、空気中の塵が洗い流されて、空気が透き通りから、星が良く見えるようになる。

「どうして起こしてくれなこのみ？」

セインがこの星空を独り占めしていたのかと思えば、キャラはふう、と、頬を膨らませた。

「えつ、だつて、キャラ寝てたし？」

そういう答えが返つて来るだらう事は百も承知のキャラだ。

「寝ていたからつて、こんなに綺麗なんだから見せなさいよー。それとも何？ あたしに見せる気は無いって事？」

「そんなことないよ。明日の朝になつたら教えてあげようと思つていたし」

「馬鹿ね！ 教えてもらつたつて、こんなのが見なきゃ分からなーじゃない！」

空を指差しながら詰め寄るキャラに、セインはへらつと笑つ。

「ああ。田舎は一見に如かず、つて、言つものね」

「いん

鈍い音が響いた。

「痛いよ！」

衝撃でずれた眼鏡をかけなおしつつ、殴られた頭をさするセインの目には涙が滲む。

少々離れているからと、油断したのがいけなかつた。普通に地べたに腰を下ろして足を伸ばしていた自分より、寝ていながらも上半身をこちらに向けていたキャラの方が素早かつた。

「そんな御託はどうでも良いのよー！ つていうかそんな諺を知つていいなら尚更起こしなさいよー！」

「はー。じめんなさい」

セインの襟首を鷺掴みにして、まだ拳を作つたままのキャラに、セインは迫力負けして、再び謝つた。

「じゃあ、一緒に星見をしようか？」

「じゃあ」と、何をしているかと思えば、はい、と、カップを手渡

された。

「え？」

思わず受け取って、両手で持つていれば、とぱとぱと紅茶を注がれた。

「ほんとはねー、僕もキャラルと一緒に星を見たくて、起しあうかどうじよしあが悩んでたことだったんだ」

そう言つと、セインは自分のカップにも紅茶を注ぐ。

セインの影に隠れて見えなかつたが、すぐ傍に、紅茶のセットが置いてあつた。そして、このタイミングで紅茶が注がれ、キャラルが手に持つているカップには、果然としている間にとつとつと角砂糖とミルクが注がれて、じ丁寧にも、くもくもとスプーンでかき混ぜられた。と、いうことは。

「紅茶淹れてみたまでは良かつたんだけど。あんまり気持ち良かさうに寝てこるから、どうしようかなあつて」

「セインって、間抜けは間抜けだけど、時々底抜けに間抜けよねえ」  
かき混ぜられて、カップの中でクルクルと回る液体を見詰めて、キャラルはしみじみと呟いた。

「酷いな。そこまで言つ事ないじゃないか」

「だつて、星に気がついて、紅茶飲みながら見よしあつて思いついて、いそいそ準備して、あたしの分まで用意して、その肝心のあたしを起こそうとしてから起こすべきか悩んだんじょ。目に見えるようだわ」

一連の自分の行動を言つぱだられて、セインはびしつと固まつた。

「な、なんでわかるの？」

「状況証拠が揃つているも。すぐ出でてきた紅茶も、カップが二つあるのも、そういうことじょ」

セインは時々、キャラルは探偵にでもなつたら良いのではないかと思つ。

「うん。美味しいわね」

一口飲んで、満足そうにキャラルが笑う。

「えへへ」

キヤルの笑顔につられてセインも笑う。

「キヤルとこうして、星が見れるの、嬉しいな」

「はいはい」

いい加減な返事をしつつ、キヤルも嬉しく思う。だつて星は綺麗で、紅茶が美味しい。

その紅茶が、いつもより甘いのは、きっとセインが角砂糖の量を間違えたからだ。

一人で空を見上げて、のんびりとした時間を過ごす。こんな日が、たまにはあつてもいいだろう。

暫くして、星座の講釈を始めたセインの話が長くなり、うんざりしたキヤルに殴られるのは、この一人らしい出来事だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4030h/>

---

HEAVENの小話

2010年10月16日14時58分発行